第5回日本宗教研究・南山セミナー報告

後藤晴子
Gotō Haruko

1. はじめに

さる 2020 年 1 月 11 日・12 日の 2 日間、南山宗教文化研究所において「第 5 回日本宗教研究・南山セミナー」が開催された。2013 年から開始され今回で第 5 回目を数える本セミナーは、海外の大学院で日本の宗教を研究する日本語を母語としない若手研究者を招聘し、研究発表及び日本人研究者とのディスカッションを日本語で行う機会を提供することを目的のひとつとしてきた。また 2017 年度からは名古屋大学・人類文化遺産テクスト学研究センター（CHT）との共催となり、日本学術振興会拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）「テクスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創世学術共同体の構築」の一環として実施している。

本年度は外国人若手研究者による 5 名の個人発表と 5 名のディスカッサントを交えた討論に加え、新しい試みとして日本国内の大学に就職し教鞭を執る 3 名の外国人研究者による「共同研究と日本での就職について」というパネルディスカッションも開催し、2 日間で研究所内外から 25 名程度の参加者が集い様々な議論が行われた。筆者は本セミナーに 1 日目の司会として関わった。本稿では本セミナーの発表およびディスカッションの概要について簡単に報告したい。

セミナーの参加者 5 名の氏名と発表タイトル、二日目のパネルディスカッション「共同研究と日本の就職について」の登壇者は以下の通りである。司会はそれぞれ南山宗教文化研究所のメンバーが担当した。

（個人発表）
第一日目：
司会：後藤晴子
黄潔（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科）、「鬼払い役に見る日中儺文化の一側面」
Zuoyi Chen (The Education University of Hong Kong)、「国境を越えた神道―台北・長春における日本の海外神社のケースより」
第二日目：
司会：深堀彩香
Natalie McKay (University of Melbourne)、「［ヒメ］と［ヒコ］に関する新思考」
Mia Tillonen（北海道大学）、「神社空間の構築と競合―京都市・晴明神社の事例」

（パネルディスカッション）「共同研究と日本での就職について」
司会：Matthew McMullen
Timothy Benedict（関西大学）
Clinton Godart（東北大学）
Andrea Castiglioni（名古屋市立大学）

第5回日本宗教研究･南山セミナーのパネルディスカッション

外国人若手研究者による個人発表は45分の発表と45分のディスカッションの合計90分で構成され、本セミナーの特徴はこのディスカッションの長さにあるといえる。本年度は、期せずして全員が日本神道や日本仏教に関わる発表であった。これらの発表に対して、ディスカッサントの阿部泰朗氏（龍谷大学）、岩田文昭氏（大阪教育大学）、小林奈央子氏（愛知学院大学）、近本謙介氏（名古屋大学）、吉田一彦氏（名古屋市立大学）およびオーディエンスから様々な質問およびコメントが出され、時間の許す限り活発な討論が行われた。また、第二日目のパネルディスカッションでは、パネリストに対して、発表した若手研究者から沢山の質問が寄せられた。以下それぞれ概要を報告する。

2. 若手研究者の個人発表とディスカッサントの概要

南山宗教文化研究所の奥山倫明第一種研究所員の趣旨説明とディスカッサント5名の研究者の自己紹介の後初日の最初に発表を行った黄潔氏は、日中両国における追儺文化の伝播と変容のあり方について日中両国におけるフィールドワークで得られた資料に基づいて考察、分析を行った。氏はまず従来の日中の儺（な）、追儺に関する研究は主に歴史資料に基づいてその歴史と系譜が論じられているが、それでは不十分であると指摘する。中国の儺は1960年から70年代の文化大革命の抑圧を経て復興したもの、古代の儺儀礼との連続性はみられない。次に氏は儺行事の独自展開を見る必要があるという立場から、非物質文化遺産に指定されているトン族の儺儀を事例に分析を行った。貴州省のトン族の儺儀（追儺）は、文革期以降芸能や文化遺産として復活し特定の村落社会を単位として実施されている。例えば広西チワン族自治区三江トン族自治県G村の旧暦12月に実施される追儺儀礼は、文革期の中断を経て2013年に復興され

た儀礼だが、上座部仏教の影響を受けておらず、風水師によって儀礼が取り仕切られている。風水師によって執り行われる追儺は、火災をもたらす悪霊を祓うという点において古代の儺に類似しているものの、「鬼払い役」は古代の儺行事においてそれを担った仮面を被る人物ではなく、民間宗教の専門家である風水師が実施しているといった点で「儺儀」とは言えないものになっている。

これに対して日本の儺は平安時代には方相氏によって大晦日に実施されてきたが、宮中行事としての追儺は鎌倉期以降衰微してゆき、民間では毎年 2 月 3 日の節分祭における豆まき神事になって現在に至る。氏は、奈良県（薬師寺の修二会、奈良五條市の鬼走り、法隆寺の追儺式）および大分県（国東市岩戸寺の修正鬼会、豊後高田市天念寺の修正鬼会）の事例を取上げ、日本の修正鬼会が①集落を単位として寺社で実施される、②農耕の豊作祈願が行われるなど庶民信仰と密接に結びつく、③住民にとって「鬼」は追い払われるものではなく、悪い物を追い払うものとしての性格を有しているとの 3 つの特徴を示した。このように日中の追儺は独自の展開を見せており、「鬼」役とそれに関わる民族の変容を考察することによって東アジア文化全体の追儺研究の新たな局面が開けると提示された。

黄氏の日中の追儺に関する発表に対して、阿部氏から中国の儺と日本の追儺の比較研究の困難さについて指摘があった。阿部氏からは続けていわゆる「伝播論」に対しては研究を行う上で安易に同調せず、あくまでも慎重な態度が求められるとともに、そこには多様な「鬼」をどう位置づけるのかという問題が残されているというアドバイスが、愛知県奥三河の花祭をはじめとする日本の事例の提示とともに行われた。吉田氏からはそもそも日本の「鬼」は中国とは異なり、インド的鬼神と密教の鬼神イメージが重奏しているため、場合によってはインドの鬼も含めて考察したらよいのではないかと指摘があった。大晦日行事である儺（追儺）と正月行事である修二会（および修正会）行事を一様に考えるのではなく、儺、修二会、密教の関わりを考える必要性があるのではないか、との指摘も行われた。これらのコメントに対し発表者である黄氏からは、日本の調査は現在はじめたばかりであり、日本の「鬼」をどう考えていくかは今後の課題であるとの問題意識が提示された。

次に発表を行ったシェン氏は、日本の海外神社とモダニズムの関係について、台湾と長春の神社を事例に分析し検討を行った。本領域に関する研究は多くは建築史的な観点からの分析であり、植民主義や帝国主義の観点から議論されているものも限られているため決して十分とはいえない。氏によると明治維新以降の日本の近代建築はおおよそ 4 つの段階に分けて理解することが出来る。ヒストリシズム的な「擬洋風建築」が一斉を風靡した第一期（1877 年から 1889 年）、モダニズム的な「様式建築」が台頭した第二期（1900 年から 1919 年）、伝統的な和風の屋根と西洋的な建築との混合にみられるような和洋折衷の「帝冠様式」が出現した第三期（1920 年から 1930 年）、「日本的なもの」への伝統回帰が見られる第四期（それ以降）である。これを踏まえ氏が具体的に事例としたのは台湾台北市の台湾神社および建功神社、中国吉林省長春の新京神社、新京忠霊塔であった。

日本統治期に建立された台湾神社（祭神：北白川宮能久親王、大国魂命、大己貴命、

少彦名命）は日本の近代建築史における建築学の泰斗・伊東忠太とヨーロッパ留学を経て日本の近代建築に大きな影響を与えた建築家・武田五一[1]が共同設計した神社である。台湾神社は当初圓山に建設が予定されていたが、1901年台北の街が一望できる台湾北西部の剣潭山に建立された。[2]建築様式は伊勢神宮と同じ神明造であったが、当時新素材であったコンクリートが鳥居等に使用されている。同様に長春[3]に1915年に建立された新京神社（祭神：天照大神、明治天皇、大国主命）も神明造でコンクリートが用いられている。[4]一方台北と長春にはこれとは全く異なる様式の神社も存在する。例えば台北の建功神社は、建築家・井手薫がデザインした和洋折衷の混合様式で、社殿が鉄筋コンクリート造で中央にドームがあるという帝冠様式で建立されている。また故関東軍司令官武藤元帥を初め陸海軍・大使館・関東局・満鉄及び特殊会社関係を合祀する慰霊塔として建立された長春の新京忠霊塔（1940年建立）の形態にも、日本独自のモダニズム的なものを見て取ることができる（鉄筋コンクリート造）。氏は日本の海外神社を見る限り日本のモダニズムは西洋からもたらされ台北や長春にも伝播したが、モダニズムと日本的な伝統の対立は見られず、ある種の交錯が見て取れると指摘した。

シェン氏の台湾及び長春の海外神社に関する発表に対し、岩田氏からは、伊藤忠太らが実際に台北に足を運んだのか、また台北や長春の海外神社には鉄筋コンクリート以外に新要素はなかったのかとの質問が出された。岩田氏によれば武田五一は東京都の求道会館[5]を建立した際、当時東京で大量生産化が進んでいた鉄パイプを利用していた。神社の近代化を検討するためにはこうした産業化によりもたらされた新しい資材との具体的な関係を見ることが重要ではないかとの指摘が行われた。近本氏からは、新しい神社の建立において神霊の勧請は不可欠で、神霊の移植には儀礼が欠かせないと指摘があった。また日本の内地のモダニズムと台湾の状況を両方とも考えることの必要性も提案された。同じく阿部氏からは建築様式（外側）だけでなくその内実をみることの必要性が指摘され、小林氏からは神社建立時の土地選定時の議論についても確認する必要があるのではないかとアドバイスがなされた。これらのコメントに対しシェン氏からは歴史や儀礼等は修士論文で一部触れているが、アドバイスは今後の研究の課題にしたいとの返答がなされた。

二日目はマッケイ氏の発表から開始した。氏は本発表で「ヒメヒコ制」にまつわる従来の「ヒメは祭祀的な役割を果して、ヒコは政治的・軍事的な役割を果す」といった学説が妥当であるか否かについて、『魏志倭人伝』『隋書』『梁書』『日本書紀』等の文書から読み解き、再検討を行った。氏によると『魏志倭人伝』の卑弥呼と男弟、『日本書紀』のウサツヒコとウサツヒメ、『常陸風土記』のアソツヒコとアソツヒメ、『日本書紀』のタブラツヒメとナツハ、『古事記』のサホヒコとサホヒメ、『日本書紀』のイニシキとオ

1. 京都帝国大学（現、京都大学）に工学部建築学科を創立し、国会議事堂を含め多くのプロジェクトに関与した人物。

2. 1944年に天照大神が増祀され台湾神宮に改称。

3. 長春は、1932年3月の溥儀の執政から終戦までの14年間は旧満州区の「新京」であった。

4. シェン氏によれば1915年の建立当初は長春に住む日本人の結婚式等の儀礼を実施する為に建立されていたという。

5. 1915年に完成した真宗大谷派の僧侶近角常観の信仰を伝えるレンガ造の仏教の教会堂で、一部鉄筋コンクリート造（求道会館ＨＰより）。

第5回日本宗教研究･南山セミナーのディスカッサント

オナカツヒメ、『日本書紀』のハヤツヒメの例は、大きく分けると①卑弥呼タイプ、②ウサツタイプ、③大和タイプに分けることができるという。

氏は①の卑弥呼タイプ（卑弥呼と男弟、神功皇后と武内宿祢など）は、祭政を掌り（俗世から遁世し）女首長によりそう男性といった構図を見て取れるが、卑弥呼以外に明白な事例は見当たらないとする。②のウサツタイプ（アソツヒコとアソツヒメ、キツヒコとキツヒメ、ナツハとタブラツヒメなど）は、九州地方に多く見られ同等の権威を持った男女（もしくは兄妹）ペアの地域の首長といった構図を見て取れるが、必ずしも役割分担は明白ではないとした。③の大和タイプ（崇神天皇とヤマトトトヒモモソヒメ、垂仁天皇とヤマトヒメ、ヤマトタケルとヤマトヒメ、仲哀天皇と神功皇后、天皇と斎宮など）は、大和王権時代に多く見られ、男性が首長として高い地位を保持し、女性はあくまでも祭祀的な役割を担う補助的な立場でしかないといった構図を見て取れるが、「共立統治」とはいえず後代の「ヒメヒコ制」と呼ぶのには違和感があるという。よって、古代日本において男女共立統治の例はあるものの、「政治的な男性・祭祀的な女性」といった単純な線引きはしがたく、従来の「ヒメヒコ制」では多様性を見逃し差異を見失うという。

マッケイ氏の「ヒメヒコ制」再考に関する発表に対し、吉田氏から研究をする上でまず研究史の理解を深めることの重要性が指摘された。発表で提示されたマッケイ氏の結論は概ね正しいが、氏が検討した高群逸枝の母系制（ヒメヒコ制）に関する研究については、歴史学では1970年代に義枝明子らが既に異議を唱えており、現在ではヒメヒコ制は成立しないというのが日本古代史の常識になっている。よってヒメヒコ制が成立しないということを前提とした上で、どう議論を展開するのかが課題としなければならない。ここには『古事記』や『日本

書紀』をどう読むのか、といったテクスト学の課題があり吉田氏は、津田左右吉の史料批判の手法（それが書かれた時代の思想史として『古事記』『日本書紀』を読む）が一つの手がかりとなるのではないか、と具体的なアドバイスを行った。阿部氏からは『魏志倭人伝』には「東夷」である日本への眼差しが含まれていることを加味したほうがよいとの指摘が、近本氏からはアマテラスとスサノヲの議論が本議論に含まれていないことに関する指摘がなされた。また小林氏からはジェンダーの視点から、卑弥呼に代表されるような女性の有り様がある種ロマン的に消費されてしまう問題についても加味したほうがよいとの指摘が行われた。これらのコメントに対してマッケイ氏からは、本発表は博士論文の一部の議論であり、別の箇所ではコメントで指摘された部分も一部検討をしているが、今回の発表では本発表内容の位置づけを全体の見取り図のなかで示せなかったとの反省と、コメントを今後の研究へ生かしたいとの解答がなされた。

最後の発表者となるティッロネン氏は、京都市の晴明神社の事例から、宗教的な場である神社はいかにして観光地として構築されうるのかについて発表を行った。氏は最初に山中弘らの宗教ツーリズム論、D・チデスターとE・リネントールの聖なる空間の議論、物質的宗教論、パフォーマンス論を整理した上で、①世俗的要素は神社空間においてどのように作用するのか、②来訪者はモノとの実践を通してどのように場所を理解しているのか、③観光地化によって多様なアクター間同士でどのような衝突が起きるのか、の3点について事例をもとに検討を行った。

京都市の晴明神社は、陰陽師・安倍晴明を祀る神社で1007年に創建。1990年代までは地域住民が姓名判断を行うローカルな神社として機能していたが、90年代後半に夢枕獏の小説『陰陽師』（1986年～）と岡野

第5回日本宗教研究･南山セミナーの参加者

玲子による漫画化（1995年～）で一躍有名になった。2000年代以降になると京都全体の観光客が増加し、晴明神社も映画『陰陽師』（2001年）が公開されると共に2010年代はパワー・スポットブームや人気フィギュアスケーターの羽生結弦が映画『陰陽師』のサウンドトラック曲の「SEIMEI」（2015年）をフィギュアスケートのプログラムにしたことをきっかけにますます人気を誇るようになった。結果晴明神社はローカルな神社から『陰陽師』、パワースポット、羽生結弦と外部の表象化によってイメージが変化し、晴明神社もインターネットにおける情報発信や、境内の整備、PR会社の利用、ブランドの確立を通して自発的かつ戦略的なイメージ・マネジメントを実施するようになったという。

氏は物質的環境が整備されモノを整備することによって、神社が積極的に「舞台」をプロデュースした結果、来訪者のパフォーマンスも影響を受けていると指摘する。例えば氏のインタビューで「御利益があるという桃のモニュメントを触わらなかった」と答えた観光客の母娘は、氏の疑問に対して「手水舎で手を清めていないから」と答えたという。彼女たちの行為には観光と宗教の線引きが認められる。また氏は晴明神社の観光化を契機に陰陽師グッズの土産物を作成した土産店に対して「晴明を冒涜している」という理由で販売中止をもとめた晴明神社の係争を取上げ、そこには真正性の基準の衝突が存在すると指摘した。氏は本事例を通して神社を取り巻く従来の宗教的な文脈に観光の文脈が加わることによって、宗教と世俗の領域の境界線が流動的になっていることを指摘した。

ティッロネン氏の晴明神社をめぐる宗教と観光化に関わる発表に対して、岩田氏からはケーススタディとしてとてもよくまとまっている一方で、岡本亮輔の議論を踏襲し信仰なき実践を強調しすぎている点についての疑問も呈された。岩田氏は現在のスピリチュアルブームを考える際、信仰がパワースポットへと結びつくことがあるとともに、お伊勢参り等をはじめとして聖地の観光化は既に行われ物見遊山（観光）と信仰の境界はそもそも曖昧であったことを加味する必要があるとアドバイスを行った。また小林氏からも同様に、宗教とツーリズム研究における「軽い宗教」という言葉の問題が指摘された。近本氏からは、消費される信仰空間として晴明神社が論じられているが、ケーススタディとしてどこに向かうのか、一般性と普遍性を保ちつつ、それがどう特殊性に関わるのか、といった点が今後重要になってくるとのコメントがなされた。吉田氏からは欧米とは異なる日本人の信心の構成要素を考察する重要性が指摘され、阿部氏からは京都全体の神社をめぐるヘゲモニーの戦いのなかで晴明神社がどう位置づけられるのか、といった問題意識の重要性も指摘された。これに対してティッロネン氏からは、物質的宗教論を用いてどのように論じることができるのかを今後も考えていきたいとの返答がなされた。

3. パネルディスカッションと総括

2日目の午後は上述したとおり、南山セミナー初の試みである日本の大学で就職を果した外国人研究者によるパネルディスカッションが実施された。まずそれぞれのパネリストから日本で就職するに至るまでの自らの経験談が話された。

関西学院大学社会学部で教鞭を執るティモシー氏は、自らの経験をもとに日本で大学教員になるためには①博士論文だけでは

十分ではなく学術雑誌への論文投稿を積極的にしなければならないこと、②公募によっては非常勤講師の経験が評価されること、③公募の書類は大学によって形式が異なることに注意する必要があるなどの欧米とは異なる点について説明を行った。

続いて名古屋市立大学で教鞭を執るカスティリオーニ氏からは日本の慶應大学で研究員を務めた経験が、日本での就職を希望することにつながったとの話があった。また直接面接が重視される日本の採用面接についても言及があった。また氏は、欧米では卒業論文の指導教員は学生が自由に選択出来るが多いため、日本の大学の「専門演習」科目で学生の卒業論文の指導をすることに当初戸惑ったこと、日本では大学によっては欧米ではTAが担う学生の個別のケアも教員の仕事の一部であること等についても触れた。

北海道大学で教鞭を執るゴダール氏からも、論文は早めに投稿すること、日本語で論文を書くように努めること、また日本でのネットワークを構築する重要性が指摘された。彼自身招聘研究員を日本の大学で経験したことが大きかったと振り返った。また採用に関しては偶然性も高いので、上手くいかないときに自分の研究やパーソナリティに問題があるのではないかと悩みすぎない方がいいとアドバイスがあった。これに対して近本謙介氏や吉田一彦氏らから国外の応募者に対してはスカイプを用いた面接が取り入れられつつあるなど、近年の日本の大学の採用の変化について言及があった。また若手研究者からは非常勤や公募に関する具体的な質問が出された。

会では最後に個人発表とワークショップののち、発表者とディスカッサントおよびオーディエンスを交えた活発な議論も行われ、第5回の南山セミナーは無事幕を閉じた。また翌日はエクスカーションが行われ、ディスカッサントの阿部氏や近本氏らが若手研究者と共に知多半島の神仏習合と関わりの深い寺社を巡った。今回参加した若手研究者からは日本国内の研究機関でこのような取り組みは貴重で、それぞれ日本語での発表には苦心したが大変よい機会を持てた、今後の自らの研究に生かしていきたいという声が聞かれた。またディスカッサントやオーディエンスからも、若手研究者への激励と共に今後も同様の取り組みを継続していきたい、ほしいとの声も聞かれた。学際的・国際的な取り組みは学問の発展には必要不可欠であり、本セミナーは改めてその重要性を示唆するものであり、南山宗教文化研究所にとっても大変有意義な機会であったといえよう。最後に、今回の発表者の今後の研究の発展と活躍を祈りつつ報告を終えることとする。

ごとう・はるこ
南山宗教文化研究所研究員